スペイン・モロッコ出張報告

立石博高（東京外国語大学外国語学部教授）
佐藤健太郎（日本学術振興会特別研究員）

前回（今年 2 月）の佐藤健太郎のチュニジア・モロッコでの予備調査に引き続き、今回は 7 月 1 日から 16 日まで 2 週間あまりの日程でスペイン・モロッコにおいて佐藤健太郎と立石博高は、史資料ハブ印刷媒体資料班のテーマに関わる史資料調査を実施した。今回の目的は、2 月の予備調査で貴重な文書類のデジタル化への可能性が開けたテトワン（モロッコ）のダーウード図書館との間で今後の提携について具体的な協議をおこなうこと、およびスペイン・モロッコ各地の研究機関・図書館を訪問してさらに協力・提携関係を結べるところがないかを探ることであった。

最初の訪問地マドリード（スペイン）では、昨年度まで東京外国語大学外国人講師をつとめておられたタニ・モラタヤ氏にいろいろとお世話になった。到着翌日の 7 月 2 日、最初の訪問先はトレード（スペイン）のセファルディ博物館 Museo Sefardí de Toledo であった。14 世紀に建設されたかつてのシナゴーグの中に作られたこの博物館では、スペインを中心にしたユダヤ教徒の遺産に関する展示をおこなっている。今回は、テトワンのユダヤ教徒共同体に関する著作もあるロペス・アルバレス López Álvarez 館長と面会することができた。ここでは、ユダヤ教徒によって著わされたかなり早い時期の刊本が所蔵されているとのことで、我々はそこに興味を抱いたが、複写にはスペイン文化省からの許可が必要で館長の一存では判断を下すことはできないという。とりあえずは、所蔵資料の目録を申請することからはじめることになった。

トレードから戻って夕方にはマドリード市内にある高等学術研究院 CSIC の文献学研究所 Instituto de Filología でアラブ学部門のロドリゲス・メディアーノ Rodríguez Mediano 氏、およびヘブライ学部門のヤコブ・ハサン Iacob Hassán 氏の研究室を訪れた。ここはスペインにおけるアラブ学およびヘブライ学の総本山ともいうべき研究機関で、*Al-Qantara*、*Sefarad* というおのおの分野でスペインを代表する学術雑誌刊行をになっている。ここには貴重なアルハミーア手写本（モリスコがアラビア文字を用いてロマンス語を表記したもの）が所蔵されており、そのデジタル化の成果が CD-ROM の形で公刊されているが、残念ながら絶版となっていた。そこで今後、ロドリゲス・メディアーノ氏から、この CD-ROM の複製入手の可能性について口ぞえを頂くことになった。また、自身モロッコのユダヤ教徒家系出身でもあるハサン氏からは、セファルディーム研究の現況について、いろいろと貴重なお話をうかがうことができた。

7 月 3 日は、土曜日であったが市内のユダヤ=キリスト教研究センターCentro de Estudios Judeo-Cristianos を訪れた。ここは、シオンの聖母修道会がユダヤ教・キリスト教間の友好を目的に運営しているところで、近現代スペインにおける反セム主義関連の資

料があるのではないかと訪れてみた。残念ながら、目ぼしい資料はなかったが、このセンターの活動自体がスペインにおけるある種の他者認識を反映しているように思われ、それはそれで興味深かった。

7 月 5 日には、マドリードで最後の訪問先であるマドリード大学メネンデス・ピダル図書館 Biblioteca Menéndez Pidal を訪れた。スペイン中世文学の大家である故メネンデス・ピダルの名を冠した図書館で、コンベルソ（改宗ユダヤ教徒）の手になる中世スペイン文学の資料があるのではないかと行ってみたが、こちらもあまり成果はなかった。

翌日からは、地中海を渡りアフリカ側で調査を続行した。最初の訪問先はスペイン領の飛び地メリーリャである。7 月 7 日に訪れた同市のメリーリャ総合文書館 Archivo General de Melilla では、館長のモガ・ロメーロ Moga Romero 氏に歓待していただいた。ここの文書館には、メリーリャ史の手稿資料のみならず、スペイン統治下のモロッコ保護領時代に出版された書物、そして 19 世紀から 20 世紀にかけての地図、版画、写真（当時のメリーリャと周辺のモロッコ地域を知るうえでの貴重な印刷媒体資料）が数多く納めてあることを同氏の館内案内と説明によって知ることができた。そして書物に関してはカタログとパソコン入力化が済んでいるものの、後者の二つのジャンルに関しては予算上からいまだにそれが進んでいないとの話しを受けた。そこで、本 COE プロジェクトでは、このカタログ化とデジタル化に協力する可能性があることを確認し、今秋以後、協定締結を行なう方向で努力することに合意した（ただし、締結にはメリーリャ市当局の許可が必要とのこと）。

メリーリャからは陸路国境越えをしてモロッコに入り、険しい山岳地帯とのどかな田園とが繰り返し現れるリーフ山地を縦断してテトワンへと向かった。テトワンに到着した翌日の 7 月 10 日にはテトワン大学教授ベンアブード Benaboud 氏を訪問し、2 月の予備調査に引き続き、プロジェクトの概要説明とあらためて協力要請を行った。多忙の身にもかかわらず、今回も快く我々への協力を約束してくださり、さまざまな便宜を図ってもらえることとなった。また、同じくテトワン大学教授ジビルーDjbilou 氏との面会もベンアブード氏の紹介で実現し、来年度に印刷媒体資料班で予定している国際シンポジウム（19 世紀から 20 世紀にかけてのスペインとモロッコのお互いの他者認識を印刷媒体資料を通じて明らかにすること）での報告を要請したところ、快諾していただいた。ジビルー氏は、文学作品を通してモロッコのスペイン像について研究しており、ジブラルタル海峡の両岸における相互イメージの検討を主題とした来年度の国際シンポジウムでは刺激的な議論を展開していただけるものと期待している（なお、スペイン側からのモロッコ像については、バルセローナのポンペウ・ファブラ大学教授マルティン・コラーレス Martín Corrales 氏を招聘の予定）。

7 月 11 日はテトワンの南約 60km の小都市シェフシャーウェン（シャーウェン）を訪れた。モリスコたちの町（17 世紀初めにスペインを追放された改宗イスラム教徒であるモリスコが多数ここに移住した）であるとして知られるところであり、現在は旧市街の美しい

町並みからかなり多くの観光客を集めているところでもある。ここではシャウエンの文化遺産の保存や文化活動の後援をおこなっている地元のヴォランティア組織であるリーフ・アンダルス協会を訪れ、当地における史資料の保存状況を問い合わせた。同協会自身も手写本や文書類の保存事業には関心を抱いているとのことだったが、残念ながらそのほとんどは公的な図書館や文書館ではなく、ライスーニー家をはじめとする旧家が所蔵しており、なかなか一般には公開してくれないという。今回は、今後とも同協会とは連絡を取り合おうというにとどまった。

7 月 12 日は、テトワン総合図書館 Bibliothèque Générale et Archives de Tétouan を訪れ、副館長のドゥッカーリーDoukkali 氏と面会した。同図書館は、独立以前はスペイン保護領下における中核的な図書館として位置付けられており、それゆえにスペイン・モロッコ関係に関連する重要史資料があるのではないかと期待してきた。しかし残念ながら、スペイン保護領時代にスペイン語で発行された雑誌・新聞類は、植民地支配終焉とともにスペインへ持ち去られたり、独立直後の混乱のために行方不明になったものも多いとのことで、あまり多くは残っていないようであった。また、ちょうど 7 月 5 日から一般への閲覧を停止して図書の整理期間に入っていたこともあり、実際にどのような史料が存在しているのかを確認することもできなかった。プロジェクトへの協力の可能性も、当図書館が完全にモロッコ文化省の管轄下にあることもあって、まずはモロッコの首都ラバトの本省との交渉が必要であるとのことであった。

7 月 13 日午前は、今年 2 月の予備調査の際にも訪問したダーウード図書館へと向かった。同図書館の概要や蔵書については、前回調査の報告書に記したので詳しくはそちらを参照されたいが、テトワンの旧家から収集した多数の文書類がとりわけ重要であろうと思われる。同図書館では館長のハスナー・ダーウード Hasna Daoud 氏に改めて我々のプロジェクトの意義を説明したうえで、所蔵資料のマイクロ化・デジタル化への協力を承諾していただいた。所蔵資料についてはほぼカタログ化されているとのことなので、まずはこれまでに整理されたカタログのコピーをいただき、マイクロ化・デジタル化の対象となる資料の選定を日本でおこなうこととした。また、当図書館には作業に必要な機材はほとんどないので、スキャナやデジタルカメラなどの準備も必要になるであろう。同図書館との間には、秋頃をめどに正式な協定書と覚書をかわすつもりである。

同日午後はアブド・アルマリク・サアディー大学（テトワン大学）本部を訪問し、副学長のムサーウィーMoussaoui 氏と面会し、我々のプロジェクトについて説明した。同大学には特に貴重な史資料があるわけではないとのことだが、教員スタッフの中にはモリスコ・セファルディーム関連の専門家も多い。機会があれば我々のプロジェクトについて学内で周知してもらえるよう要請してきた。

最終日である 7 月 14 日は、かつては国際管理地区として各国領事館がおかれていたタンジールへ向かい、タンジール・アメリカ公使館美術館 Tangier American Legation Museum を訪れた。ベンアブード氏の教示により、アメリカの外交文書が近現代のスペイ

ン・モロッコ関係を読み解くうえで参考になるであろうとの判断からだった。ここには、タンジールのアメリカ公使館と本国との間の書簡がマイクロフィルム化されて所蔵されており非常に興味をそそられた。このマイクロフィルムについては、帰国後に米国立公文書館 NARA より入手可能であることがわかったので、別途注文することにした。

今回の出張では、ダーウード図書館をはじめいくつかの機関との間で協力関係を構築することができた。今後も今回の調査で構築した関係をもとに、史資料のマイクロ化・デジタル化に向けた作業を進展させていきたい。

末筆ながら、今回の調査ではルミ・タニ・モラタヤ氏およびムハンマド・ベンアブード氏にいろいろとお世話になった。我々の訪問を快く受け入れてくださった各研究機関・図書館の方々に加え、上述のお二方にも謝意を表したい。